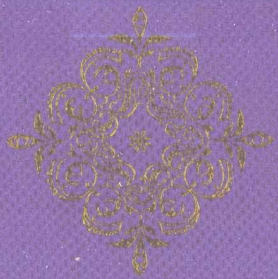

A TREASURY OF JAPANESE POETRY

日本の詩歌

8

斎藤茂吉

中央公論社

日本の詩歌　8
©1968

斎藤茂吉

昭和43年 5 月 6 日初版印刷
昭和43年 5 月15日初版発行

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷　凸版印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

赤光 5
あらたま 83
つゆじも 160
遠遊 180
遍歴 189
ともしび 200
たかはら 220
連山 230
石泉 238
白桃 254

暁紅 273
寒雲 291
のぼり路 307
霜 315
小園 330
白き山 345
つきかげ 363
詩人の肖像 臼井吉見
鑑賞 山本健吉
年譜
カット 平福百穂
木下杢太郎
斎藤茂吉

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

斎藤茂吉

赤光

自明治三十八年
至明治四十二年

『赤光』は大正二年十月十五日発行。明治三十八年から大正二年八月までの歌八百三十四首を、逆年代順に排列した。大正十年十一月、改選版を発行し、改作や削除を加え、七百六十首を制作年代順に排列した。ここに収めたものは、この改選版である。

「本書の『赤光』という名は仏説阿弥陀経から採ったのである。かの経典には『池中蓮華大如車輪青色青光黄色黄光赤色赤光白色白光微妙香潔』というところがある。予が未だ童子の時分に遊び仲間に雛法師がいてしきりにお経を諳誦していた。梅の実をひろうにも水を浴びるにも『しゃくしき、しゃっこう、びゃくしき、びゃっこう』と誦していた。『しゃっこう』とは『赤い光』のことであると知ったのは東京に来て、新刻訓点浄土三部妙典という赤い表紙の本を買った時分であって、あたかも露伴

1　折に触れ　明治三十八年作

霜ふりて一もと立てる柿の木の柿はあはれに黒ずみにけり

浅草の仏つくりの前来れば少女まぼしく落日を見るも

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は銭を呉れたまひたり

戦場の兄よりとどきし銭もちて泣き居たりけり涙おちつつ

馬屋のべにをだまきの花とぼしらにをりをり馬が尾を振りにけり

真夏日の畑のなかに我居りて戦ふ兄をおもひけるかな

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実の熟める畑に

たらちねの母の辺にゐてくろぐろと熟める桑の実を食ひにけるかな

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみをつばらかに見つ

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは大きかりけり

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひて断りて居ればにほひするかも

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて来にけり

寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝散りしばらく見ねばみな散りにけり

の『日輪すでに赤し』の句を発見してうれしく思ったころであった」（初版跋）。幸田露伴のこの句は『風流微塵蔵』「さざ舟」中に「今落ちかかる日輪紅く」とあるものの単純化である。

「おもうに短歌のような体の抒情詩を大づらにするということは、切腹面相を見せるようなものであるかも知れない。むかしの侍は切腹して臓腑も見せている」「『赤光』は過去時における私の悲しい命の捨てどころであった」（再版跋）

現存する茂吉の作歌は明治三十一年が最初だが、三十七年末ごろ、神田の貸本屋で正岡子規の『竹の里歌』を借りて読み、それが世にいう歌とはなはだしく違っていて、身辺の平凡な風物を分りよい言葉で現わしていて、しかも新鮮に聞

数学のつもりになりて考へしに五目ならべに勝ちにけるかも

かたむく日すでに真赤くなりたりと物干に出でて欠せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まりて何もせず居り

2　地獄極楽図　明治三十九年作

浄玻璃にあらはれにけり脇差を差して女をいぢめるところ

飯の中ゆとろとろと上る炎見てほそき炎口のおどろくところ

赤き池にひとりぼつちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ

いろいろの色の鬼ども集りて蓮の華にゆびさすところ

人の世に嘘をつきけるもろもろの亡者の舌を抜き居るところ

罪計に涙ながしてゐる亡者つみを計れば巖より重き

にんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

えるのに驚き、これなら自分にも作れるのではないかと思って一部を筆写した。これは考えると運命的な出会いで、そのころの茂吉の習作歌は、『竹の里歌』を繰り返し読み、気持をこめた丹念な筆つきでそれをなぞろうとしている。

一折に触れ」は、三十九年三月、伊藤左千夫に入門する前の習作の抜抄で、大正二年『赤光』編纂時の推敲の手が加わっている。

茂吉の郷里、金瓶村（今の山形県上山市金瓶）の生家の隣に時宗寺院宝泉寺があり、毎年旧の正月と盆の十六日に、地獄極楽の掛図十一幅（嘉永六年・一八五三年作）が本堂に掛けられた。それは幼い彼に驚きと恐怖を与え、成人した彼の胸にその印象は強く生き残った。それは人間の生と死についての彼の原体験の一つをなした。

をさな児の積みし小石を打くづし紺いろの鬼見てゐるところ
もろもろは裸になれと衣剥ぐひとりの婆の口赤きところ
白き華しろくかがやき赤き華あかき光を放ちゐるところ
ゐるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆらと下り来るところ

3　螢と蜻蛉　明治三十九年作

蚕の部屋に放ちし螢あかねさす昼なりしかば首すぢあかし
蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて飛びそめにけり
あかときの草の露玉七いろにかがやきわたり蜻蛉うまれぬ
あかときの草に生れて蜻蛉はも未だ軟らかみ飛びがてぬかも
小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生れし蜻蛉もかがやきにけり

4　折に触れて　明治三十九年作

その印象を思い出しながら一連の歌に作ろうと試みたのは、三十八年五月十日であった。友人渡辺幸造宛の手紙に、その連作の原形とその制作上の苦心とを書いている。子規の「絵あまたひらげ見てつくれる」と詞書した連作、ことに涅槃図を見て作った「木のもとに臥せる仏をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ」の作に感動して、それに倣ったものである。歌集に三十九年作とあるのは誤り。

仏教用語のほかに、「とろとろと」「ゆらゆらと」「にんげん」「牛馬」「ひとりぼつち」などの語彙が、特異な匂いを発散している。仏教的情操は幼時から培われていたが、その上に人間の生のかなしさともいうべきものが、この連作に漂い、それはひいては『赤光』全体の主たる色調をなした。

前ページ「飯の中ゆ」の歌「炎口」は、露伴の「恨むらくは

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo

来て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり蕗の薹も咲けり　（早春二首）

あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしき処つくづくし萌ゆ

生きて来し丈夫がおも赤くなり踊るを見れば嬉しくて泣かゆ　（凱旋二首）

凱旋り来て今日のうたげに酒をのむ海のますらをに髯あらずけり

み仏の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に浮くらし　（仏生会二首）

み仏の御堂に垂るる藤なみの花のむらさき未だともしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて並びてを萌ゆ　（若芽二首）

はるさめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねくふくらみにけり

みちのくの仏の山のこごしこごし岩秀に立ちて汗ふきにけり

天の露おちくるなべに現し世の野べに山べに秋花咲けり　（立石寺一首）

涅槃会をまかりて来れば雪つめる山の彼方に夕焼のすも

我が忍慧弱く不持如是法、羊は是已成畜生、蹄伴は是当成畜生、炎口は是已成餓鬼、蹄伴は是当成餓鬼なることを」（『霧護精舎雑筆』）の句から来ている。亡者（餓鬼）であり、口から炎を吐いているのだ。「炎口を思えば深いあわれはあるであろう」（『童馬漫語』）

「もろもろは」の歌の姿は、三途の川ほとりにいて、亡者の衣を奪う脱衣婆。

「白き華」は前掲阿弥陀経の文句「赤色赤光白色白光」を思わせ、白蓮紅蓮の咲く極楽のイメージ。

「来て見れば」「あづさゆみ」「みちのくの」について、茂吉は「まえの地獄極楽図から、もっと万葉調にゆったりと行こうとする傾向を示すに至った」（『作歌四十年』）と言っている。記憶にある郷里金瓶村の風景である。立石寺は、芭蕉が「閑さや岩にしみ入る蟬の

小滝まで行著きがてにくたびれし息づく坂よ山鳩のこゑ

夕ひかる里つ川水夏くさにかくるる処まろき山見ゆ

淡青の遠のむら山たび来つるわが目によしと寝つつ見にけり

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに吹きまく天つ風かも　（蔵王山五首）

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れてかがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清し山高みかも

雲の中の蔵王の山は今もかもけだもの住まず石あかき山

あめなるや月読の山はだら牛うち臥すなして目に入りにけり

病癒えし君がにぎ面の髯あたり目にし浮びてうれしくてならず

（蘇真氏病癒ゆ）

5　虫　明治四十年作

花につく赤小蜻蛉もゆふされば眠りにけらしこほろぎのこゑ

声」の句を詠んだ山寺。茂吉の郷里に近い。

茂吉は三十九年一月、はじめて書簡で左千夫に歌を見てもらった。そのとき採られた五首はただちに『馬酔木』に発表され、その中に「来て見れば」「あづさゆみ」の二首が、ほぼそのままの形で見える。

「火の山を」以下、蔵王山の歌がはじめて現われた。故郷金瓶村で、始終親しんでいた山で、この後も幾度か蔵王に登り、山頂に歌碑も立てられた。茂吉が親しみとともに、宗教的心事に近いような畏敬の念を抱いていた山だった。「父は三山や蔵王山あたりを信心して一生四足を食わずにしまった」（『念珠集』）

「虫」は新聞『日本』の課題歌（左千夫選）に応募した歌。

秋の夜の虫の音の、身に沁み透

とほ世べの恋のあはれをこほろぎの語り部が夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも弥勒は出でず虫鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに虫鳴くと書に残りて年ふりにけり

てる月の清き夜ごろを蟋蟀やねもころころに率寝て鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず虫の音も空に消入りうらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てば土の虫音はほそほそと悲しらに鳴く

なが月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに螻蛄も交りてよき月夜かも

6　雲　明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の旗ぐも遠にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの湧き巻きのぼる

蔵王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも湧ける見ゆ

るような悲しみを詠むのに、こおろぎの語り部、弥勒、ヨルダンの河などと、想像を八方に馳せるところが、当時の茂吉の傾向であった。その空想的な習癖について、彼は次のように言う。「今からおもえば、少年にして読んだ露伴ものなどの影響があるに相違ない。そのころ、堀内卓造君が作歌しはじめ、新鮮な写実風の歌を作った。その対照が目立つので、伊藤左千夫先生は、『堀内は写実派、斎藤は理想派』などといって、私のそういう臭味をも全くは否定されなかった。これはかたじけないことで、そういう師匠の励ましがなかったら、私はとおのむかしに作歌を廃していただろう」（『斎藤茂吉集』巻末の記）

「月落ちて」の歌。左千夫の朱の入った歌稿が残っていて、上句「現しき世月読は落ち未だしも」とあったのを、左千夫が添削した

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる五百つ白雲

遠ひとに吾恋ひ居れば久かたの天のたな雲に鶴とびにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の背に雲ひそむ見ゆ

八重山の八谷かぜ起る時のまや峡間みなぎりて雲たちわたる

たくひれのかけのよろしき妹が名の豊旗雲と誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたずまひ物ほしにのぼりつくづくと見つ

ひと国をはるかに遠き天ぐもの氷雲のほとり行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲恋ひしもろこしの君は昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しろがねと笹べり耀く渡津見の雲

ものであることが分る。弥勒は仏滅後五十六億七千万年の後にこの世に生れて、衆生を済度すると仏説に言われる菩薩。弥勒信仰は東国の農村地方に浸透していた。

「雲」も『日本』課題歌。「雲」は九月、「虫」は十一月だから、制作はこの方が早い。

「雲」という課題にふさわしく、茂吉はおおらかで、のびのびとした声調に一首を整えようと苦心している。万葉の歌や左千夫の歌を初心者のようになぞろうとしているところが見える。

「あめつちの」の歌には、その年の左千夫の、

九十九里の磯のたひらは天地の四方の寄合に雲たむろせり

の影響が見え、「たくひれの」は、「たくひれの懸けまく欲しき妹が名を」「渡津海の豊旗雲に入日さし」（万葉集）などを頭に置いて

7　苅しほ　明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り苅しほに黄ばめる小田を馬の来る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒に入りけり

ふゆの日のうすらに照れば竹群は寒々として霜しづくすも

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞あらはれにけり

霜の夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥に朱の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清掻にしも弾くべかりけり

月あかきもみぢの山に小猿ども天つ領巾など欲りしてをらん

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがたをわがかへるなり

8　留守居　明治四十年作

まもりゐる縁の入日に飛びきたり蝿が手を揉むに笑ひけるかも

いる。「豊旗雲」の造語に感心した茂吉は、自分でも、「小旗雲」「大旗雲」などと作ってみて、喜んでいるのである。

「苅しほ」の一連は、静かな凝視の利いた晩秋初冬の田園風景歌である。根岸派の古風な写生歌から一歩出て、作者の心持、気分、情調といったものが、一首を純化しているのが見える。「秋のひかり」「竹おほき」「ふゆの日の」「霜の夜の」などがそうである。だが、「竹の葉のさやのふる舞」「琴ひかば清掻にしも」「小猿ども天つ領巾など」「猿の子の目のくりくりを」といった言い方に、茂吉の習癖、あるいは個性が現われている。

「竹むらの」の一首は、子規の、

藤なみの花の紫絵にかゝばこき紫にかくべかりけり

の影響である。

留守居して一人し居れば青光る蠅のあゆみをおもひ無に見し

留守をもるわれの机にえ少女のえ少男の蠅がゑらぎ舞ふかも

秋の日の畳の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ留守すも

入日さすあかり障子は薔薇色にうすら匂ひて蠅一つ飛ぶ

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす羽さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉は去りて何も来ぬかも

留守もりて入日あかけれ紙ふくろ猫に冠せんとおもほえなくに

9　新年の歌　明治四十一年作

今しいま年の来るとひむがしの八百うづ潮に茜かがよふ

高ひかる日の母を恋ひ地の廻り廻り極まりて天新たなり

東海に磯馭廬生れていく継ぎの真日美はしく天明けにけり

「留守居」も新聞『日本』課題歌。「留守をもる」の歌。「え少女のえ少男の」の句は、古事記神代巻の伊邪那岐・伊邪那美の唱和、「あなにやし、え少女を。あなにやし、え少男を」から来ている。「ゑらぐ」は歓喜の意。「黒酒・白酒の御酒を赤丹の頓にたまへゑらぎ」（宣命）

「新年の歌」。「題詠的であるが、いろいろと工夫して、調べも荘重に、万葉調に行こうと努力している。長塚さんが第二首を褒めて、斎藤君は科学者だから、科学者らしい大きい歌だと言ってくれたのであった」（『作歌四十年』）

「磯馭廬」は古事記に、伊邪那岐・伊邪那美の二神が、天の浮橋に立ち、天の沼矛をさし下して、「塩こをろこをろに」画きなして引き上げた時、その矛の末から垂り落ちる塩が累り積って島となる、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbo